

“海外の夢”を捨てきれず渡米 現地で流通の仕組みを学ぶ



貨物船に乗って
旅立った(右端
が大久保氏)

ジャーナリスト 中川明紀

語り部の経営者たち



ダイオーズ 大久保 真一 社長 80歳

③

アメリカへ貨物船の船底で旅立った。

「まずカリフォルニアの共同仕入れ機構CGCに向かい、スパーで働きながら週2日は本部に行ったり、商業界の編集長に紹介してもらった経営学の権威である南カリフォルニア大学のマグニス教授を訪ねたりして、現地の流通の仕組みなどを学びました。教授からメイシーズやKマートなどの流通企業や話題の店舗を紹介してもらって勉強しました。スパーで6カ月働いた後はテキサス州のダラスに行き、まだ日本に上陸する前のセブーン・イレブンでも勉強しました」

合計9カ月間のアメリカ研修を終えると、今度はヨーロッパに渡ってイギリスや世界最大のポランタリーチェーン西ドイツのEDEKAで勉強を重ねた大久保氏。その間はホテルは一切利用せず、ずっとホームステイをすることで、欧米の一般家庭の文化を見ることができたと話す。そして、いずれば「アメリカで事業をする」という夢を抱くようになった。

しかし、2年間の研修から帰国して行ったのは、父の跡を継ぐことだ。「実は渡米する直前に長男が生まれたんです。でも、海外での生活が保障されていないので妻子を連れていくわけにはいきません。そこで両親に頭を下げて帰国後日本一の米屋にすることを約束して、妻子の面倒をお願いしました。父は引き受けてくれ、しかもアメリカ行き船賃も用意してくれました」

日本上陸前のセブーン・イレブンでも働く

「アメリカの共同仕入れ機構やドイツのポランタリーチェーンの責任者が講師を務めていました。私はセミナーが終わると通産省の担当者に講師を紹介してもらい、海外の小売業について学びたいと自分売り込みました。彼らが帰国した後、海外研修の承諾を得る

「だから就職活動では商社ばかり受けましたが、英語が苦手だったので採用にいたりません。そんな時に大学の就職部で見たのが読売広告社の募集。これからは商業もマーケティングの時代だからおもしろそうだと感じ、受けるところにしました」

「だから就職活動では商社ばかり受けましたが、英語が苦手だったので採用にいたりません。そんな時に大学の就職部で見たのが読売広告社の募集。これからは商業もマーケティングの時代だからおもしろそうだと感じ、受けるところにしました」

「だから就職活動では商社ばかり受けましたが、英語が苦手だったので採用にいたりません。そんな時に大学の就職部で見たのが読売広告社の募集。これからは商業もマーケティングの時代だからおもしろそうだと感じ、受けるところにしました」

アサヒグループHD ↓ マatchingワールド ↓ ダイオーズ ↓

(つづく)